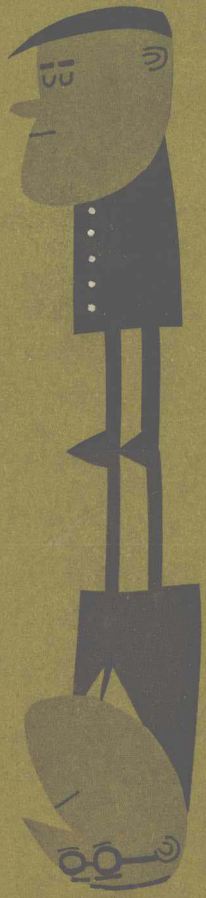
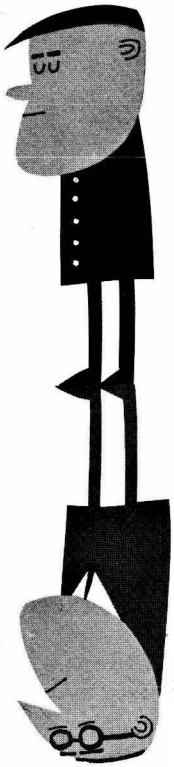
少年老い易く

山口瞳



少年老い易く



山口瞳

講談社

少年老い易く　定価 380円

昭和42年2月25日　第1刷発行

著　者　山口　瞳

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京(942)1111(大代表)
振替　東京3930

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　藤沢製本株式会社

© Hitomi Yamaguchi 1967

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

目次

少年老い易く　7
えへえへえへ　27
子雁の雁木　91
唇の端　117
ブンケツ　141
犬の歴史　165
シバザクラ　199
平和　235
鷺　263

装幀　柳原良平

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

山口瞳作品集

少年老い易く

少年老い易く

学校から帰ってきた庄助が、珍しく勉強道具を自分の部屋に置いてからすぐ茶の間へ来て学校の話をした。

「困った。困った……」

そう言って、部屋のなかを、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりした。

背丈は、もう私より高くなっていた。去年の春、私とならんだと思ったのに、それから一年経って、たちまちに追い越していた。

高校の一年になって、漢文がはじまった。そのはじめての日に「少年老い易く学成り難し」というのを教わったのである。文例でいうと「氷田地に消えて蘆錐(ろすい)短く、春枝条に入って柳眼抵(いた)る」が第一行に出ているが、漢文の教師は、誰にも親しみのある「少年老い易く」を一時間目の教材としたらしい。それは二十八頁に出ていた。また、四月の新学期の最初の授業にそこからはいってゆくというのは教師の工夫だったのだろう。

庄助は「少年老い易く」という言葉を知っていた。いい言葉だと思っていた。それが、

自分にとって非常に都合のわるい格言になっていることを知らなかった。彼は「少年老い易く」を勝手につぎのように解釈していた。

「少年、少年といって馬鹿にするけれど、少年はすぐに大人になるんだ。あっというまに大人になり老人になるもんなんだ。だから、少年を馬鹿にしてはいけない」

学校へ行って、そのあとに「学成り難し」と続くのを知って、びっくりしてしまった。そうして、さらに「一寸の光陰軽んず可からず」ときたのである。彼はがっかりしてしまった。これは彼の大嫌いな勉強のことではないか。

「ぼく、少年老い易くというのが悪い意味だということを知らなかったんだ」

それから五ヵ月経ち、九月になった。

二十六号台風のときは、静岡県と山梨県の被害が大きかった。私の住んでいる東京都北多摩郡は、東京の中心地と山梨県の中間に位する。

その夜は二階に寝ているのがおそろしいくらいに風が吹き、すぐに停電になった。トランジスタ・ラジオが国立町一帯の五千戸の停電を報じた。隣の府中市に倒壊家屋があるともいった。

「わ。恥ずかしい」

夏子が言った。キティ台風ほどではなかったけれど、かなり怖い思いをした。もし、家

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

が倒れたら、この風のなかをどうやって逃げたらいいのだろう。

その翌朝。

庭に一面に小枝と葉が落ちていて濡れていた。主な被害はつぎのようであった。

桃の大きな枝が折れた。一昨年の台風で東側の枝が折れた。こんどは西側の枝である。そのように桃は庭の中央にあって四方に枝を張っていた。一昨年の三月にこの家に移ったとき、出版社に勤めているNさんが遊びにきて、これも家賃のうちですよと言った。そのくらいに大きかった。勢いがさかんであった。はじめ、私は家にむかって伸びている一枝を切った。庄助と庭でキャッチ・ボールをするためである。次は、そうやって、二度の台風で、桃は、両腕をとられ、急に見窄(みすぼ)らしくなってしまった。この樹を丹精した人に申しわけのないことになってしまった。しかし、桃の樹がこんなに大きくなるというのは、すでに寿命が尽きていることではないかとも思われた。

折れた桃の枝を動かしてみると、その下に、大きい真鯉がいた。嵐の最中に飛びだしたのだろう。かなり時間が経っているはずである。魚を運ぶときにそうするように、濡れた細い桃の葉が鯉にへばりついていた。そのあたりにも小枝がたくさん落ちていた。

「重たい、重たい」

そう言いながら、夏子は鯉を水槽にもどした。ひっくりかえって腹を見せるかと思ったのに、鯉は、ゆらっと自分の力で進んだ。激しい雨が降り続き、そのうえに桃の枝が倒れ

て覆いかぶさったのが幸運であったかもしれない。また、嵐でなかったら、当然、猫がくわえていったろう。

藤棚が倒れた。この藤は、葉ばかり繁って、ほんの申しわけに白い花房をふたつ垂らす程度にしか咲かない。肥料が足りないのではないかと思うのだが植物にくわしい篠原にきいてみると、そうではなくて土地がよすぎるからいけないのだという。藤は、元来、痩せた土地のほうがいい。そうして、もっと根をいためつけるようなことをしたほうがいい。そうすると藤は種族保存のために、あわてて花を着けるのだという。

そういう話をきいていたから、倒れたのをそのままにして枝を剪ることにした。うるさいくらいに葉ばかり繁っているのである。そうやってから藤棚を起こしてみると、部屋のなかまで日が差すようになった。

もうひとつの被害は門が倒れたことである。白いペンキで塗った門扉であるが、左右の柱が折れていた。すぐにはどうすることも出来ないので、私はそれを裏の物置のそばまでかついでいった。

そうやって柱も扉もなくなってみると、門から玄関までの植込が別の様相を呈してくる。なんとなく、清々とする。

「宮様の家のようになったな。……赤坂離宮みたいだ」

赤坂離宮には高い鉄の門があるが、そんな気がしたのである。

庭と、家のまわりをあらまし片づけたところで、自転車に乗って篠原の家に出かけた。電話をかけて安否をきいてもいいのだけれど、もしかすると、篠原のことだから、嵐のときに一睡もしないで朝から働いて、ちょうど寝ついたところかもしれない。電話をするならば、もっと朝早いときがよかった。私はその機会を逸していた。

いちばん心配していた篠原の家の二階のベランダが無事であることが、遠くから見てわかった。そのベランダにはヨーロッパ風の布製の日除けがついていた。それが無事なのだから、たいした被害はないだろう。

私道の奥にある篠原の家の門の前で自転車をとめると、八十歳になる篠原の母の後姿が見えた。門も玄関の扉も明けはなしてあって、部屋のなかと庭の一部が見えた。玄関の右脇にある篠原の母の部屋もガラス戸が明いていた。

篠原の母は、むこう向きに中腰になって庭を見ていた。おそらく、池が荒れてしまって、篠原が水を換えているところであるにちがいない。篠原の母の姿勢は、働いている息子を見守っているというにふさわしい。

「これはいけない」

私は自転車のむきをかえた。一段落ついたところならいいのだけれど、見舞にいったつもりが、仕事の邪魔をするということになってはいけない。

「やれやれ……」

どうも篠原は家のことで働きすぎる。いま池の掃除にかかっているとすると、朝から働きづめということになる。

私は国立駅から甲州街道に続く広い大学通りに出た。そこへ出るまでにも、立木が倒れて自動車が通れないようになっているところがあった。

大学通りの桜や松が折れていた。一橋大学では二十五メートルもあるヒマラヤ杉が倒れていた。雷にでも遇ったように松の巨木が折れていた。

国立駅で中央線の不通を知った。電話線がきれていて、開通の見通しがわからぬことが黒板に記してあった。そこではじめて電話線もやられていることを知った。

もう一度、篠原の家にひきかえすと、篠原の母は、全く同じ姿勢で庭のほうを見ていた。

「やれやれ」

去年の三月の夜おそく、六本木の小さな酒場で飲んでいる私のところへ夏子から電話がかかった。庄助が急病で、すぐ帰ってきてくれという。

睾丸が腫れあがっていた。痛くて我慢ができないという。原因もわからないし、手当の方法もわからない。そこで、立川病院に連れていった。

宿直の泌尿器科の若い医者が、明日から入院しますか、と言った。ということは、彼に

も原因がつかめなくて、ただ安静にしていなくてはいけないことだけが分っているように思われた。それだけに医者にとっても親にとっても心配な病気だった。

その日は、痛みどめの薬を貰って帰った。何日か病院に通っているうちに痛みはすこしずつ薄らいでいった。それでも二週間ぐらいは歩くことも出来なかった。

思春期に体が変ったり、急に激しく成長したりすることに発する病気だろう。その前にも後にも、私は庄助と同じ齢頃の少年が腎臓などで倒れる不幸のあることを知った。

そのために、ここへ来てから毎年三月に催す草摘みの会に庄助は参加できなかった。それをたいそう残念がった。彼は撮影技師であり、私の友人たちが大好きであったのだから——。

庄助は、草摘みをおわって、酒を飲んでいる席へ、パジャマを着て、這いながらやってきた。洒落の好きな田村高一が言った。

「やあ、紅顔可憐の美少年……」

もっとずっと以前から庄助は親と一緒に風呂に入ることを拒否するようになっていた。睾丸の病気と知って、夏子が私に電話したのはそのためである。

夏休みが終り、最初に学校へ行った日に蒼い顔で帰ってきた。私も知っている上級生が八月に交通事故で亡くなったのだそうだ。その少年は春の文化祭のときに、私に原稿を頼みにきた文芸部の委員だった。依頼のときと受けとりにきたときに私は会った。眼鏡をか

けたおとなしい少年だった。私は、その年齢の少年とどういう話をしていいかわからないので、ほとんど会話らしい会話をしていない。実を言うと、言われた日に出来ていなくて、翌日も朝からかかって、少年が来たときにまだ仕上っていなくて一時間ちかく待ってもらった。その間、庄助は上級生である少年と対座していた。

二階の私の勉強部屋で『ドクトル・ジバゴ』の映画音楽のレコードが鳴っていた。私は階段の途中からひきかえした。庄助は学校から帰って、私の部屋にとじこもってレコードをかけっぱなしであると夏子が説明した。そういうことも、いままでになかった。

午後二時を過ぎてから篠原がやってきた。やはり私の想像していたように、池の水をすっかり換えてから、休憩しないで、私の家に来たのである。

「どうだった？　大変だった」

「いやあ。大変なんてもんじゃないですよ」

家が格段にがっちりしている篠原のところは、梅の老木がやられた程度だった。私がこちらの被害状況を説明すると、彼は、赤ん坊が考えこむような表情になって、きみんところは台風ではいつもひどいめにあうね、と言った。一昨年の台風では、桃が折れたほかに、物干の覆いが、横に渡した太い柱もろとも二階の屋根を通り越して表の通りへ落ちたのである。人が通っていたら大変なことになった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.